

月の花挽歌 ～9. ^{にちにち}日日平安～

9-4

興に乗ると語尾が変わるKの口癖に、同席者の誰もが可笑しがっていた。

この時とばかりにTは「さすが千両役者！合点承知之助でござる」と時代劇映画の岡っ引きまがいの悪乗りでお追従を言う。

『椿三十郎』の一件では、Tの老獪なやり口にまんまとやられたが、結果オーライを良しとしようと思うことにした長身の人気男優は、「製作費の資金調達はこれからとのことですが、人を煙に巻くことがお得意なTさんのことですから、既に目処がついているのは、あたりき車力のこんこんちきってところですかね？」と敢えて地口まじりの江戸職人言葉で笑って訊いた。

「角川春樹さんに製作総指揮をお願いしてみようかなIII」とTは嘯いてから、男優に向かって、「そうだ君が打診してくれるとありがたいんだが、どうだろう？」と答える代わりに、どうとでも取れる言葉を投げかけた。

「私にそんな力はありません。冗談はよし子ちゃんですよ！」と男優はギャグ系死語を捻り出して、無茶ぶりをやり過ぎそうとした。

「お遊びはそれくらいにして、本題に入りましょう」とKは半ば呆れ顔で促した。

その瞬間、Tの目の色が映画の撮影現場で本番のワンシーン・ワンカットのカチンコが打たれたかのように変わると、二人の女優を交互に見据えて「お二人に関しては、ピッタリの役どころが浮かんでくるのですが……」と言ってから眉間にしわを寄せて「君のタツパでは、時代劇にはそぐわないんじゃないかなー」と指で長身の人気男優に構図フレーミングをとりながら懸念を口にした。

『幕末太陽伝』での石原裕次郎はどうでしたか？ましてやメガホンを取ったのは、彼の川島雄三ですよ！」と男優はTの手カメラを睨んで、既に用意していた台詞を吐くかのように幾度となくハンディキャップを言われてきた長身は時代劇には不釣り合いとされているセオリーに抗弁した。

「君は、裕ちゃんよりデッカイいんだよ」とTは困ったような顔で言った。

「私を『椿三十郎』にキャスティングした森田監督や角川さんは時代の寵児と呼ばれています。Tさんだって負けず劣らずなんですから、頑張ってください」と男優は回りくどい言い方をした。

「黒澤さんが山本周五郎の小説『日日平安』を忠実に脚本にしたのが『椿三十郎』で、主人公が地味すぎたから、最初は東宝側に却下されてしまった。そこで用心棒の続編みたいに書き直すことになったそうさ」とTは答えにならない裏話をした。